

## 良好な日英関係の背景に

～国籍を超えた一人一人の交流が重要～

黒江 哲郎

本年6月、チャールズ三世国王の招請を受け、天皇皇后両陛下が国賓として英国を訪問されました。晩さん会でのチャールズ国王による10分間にも及ぶ長いスピーチは、徳川家康が当時の国王ジェームズ1世に送った400年以上も前の書簡が日英交流の契機になったエピソードなどを紹介しつつ、「日英関係の新たな400年に乾杯！」で締めくくられた印象的であたたかなものでした。

日英両国は今、政治・経済・外交から文化にいたるまで幅広い分野で良好な関係にあります。もちろん、安全保障も例外ではありません。

両国の外務・防衛の4大臣が集ういわゆる「<sup>ツープラスツー</sup>2+2」の定期協議では、緊密な意思疎通が図られています。英軍と自衛隊との共同訓練も年々高度化し、最近では次世代の主力戦闘機を日英伊3か国で共同開発するという画期的なプロジェクトも合意されました。

中国の台頭によりアジア地域が国際安全保障の大きな焦点となっている今、世界に影響力を持つ大国である英国がアジアへの関与を強めることは、この地域の平和と安定に大きく寄与するでしょう。

しかし、ご存じのように、日英両国には太平洋戦争の際に戦火を交えた厳しい過去がありました。今日の良好な関係に至る道のりは、決して平たんなものではなかったのです。1998年、英国に留学中だった私はそれを痛感させられる出来事に遭遇しました。

ちょうどこの年の5月に、現在の上皇様が天皇陛下としてご夫妻で英国を公式訪問され、私は妻とともに両陛下を歓迎しようと、バッキンガム宮殿に向かう馬車のルートであるロンドン中心部のザ・マルと呼ばれる通りにおもむきま

した。沿道の大観衆が小旗や手を振って歓迎する中、陛下を乗せた英王室の馬車が通過していく様は、とても華やかで感動的でした。しかし、まさにその時、事件は起こりました。

英軍の伝統的な軍装にカラフルな略綬をつけた老人たちが、いっせいに車列に背を向けたかと思うと、その中の一人があろうことか我々の目の前で日の丸に火をつけて掲げたのです。彼らはかつて日本軍の捕虜となった人々で、天皇陛下に直接抗議の意思を表明したのです。

海外で自国の国旗を目にすると、特別の感慨が湧きます。その日章旗に眼前で火をつけられたことは大きな衝撃でした。天皇陛下とエリザベス女王当（当時）を間近で目にした興奮は一気に醒め、「日本にいた頃、英国内の反日感情になぜ気づかなかったのだろう」、「同じ敗戦国のドイツは和解に成功したのに、なぜ日本は和解できないのだろうか」などと思い悩みながら帰路に就きました。

この事件の背景にあったのは、太平洋戦争中にシンガポールなどで捕虜となった英国人が、「死の鉄道」として悪名高いタイ・ミャンマー間の<sup>たいめん</sup>泰緬鉄道の建設に駆り出され、過酷な労働を強いられるなどして多くの犠牲者を出したことです。生き残った捕虜が謝罪と賠償を求める訴訟も提起するなど、強い反日感情が残る中での出来事だったのです。

他方、国旗を燃やすという激しい抗議行動は英国内で大きな議論を呼び、行き過ぎた反日感情への疑問の声も上がり始めました。その後、日英友好を望む声に促された英国政府は、元捕虜や遺族に特別慰労金を支払い、国内問題として賠償問題を決着させ、捕虜問題は徐々に収束していったのです。

今回、この問題を改めて調べ直す中で、日本の民間人が元捕虜の日本招へいや日本文化の紹介などの地道なボランティア活動を息長く続けてきたことを知

りました。こうした活動により英国国民の間で深く静かに醸成された親日感情が、関係修復に向けて英国政府を後押ししたものだと思われます。

実は、あの日の出来事には続きがあります。悄然<sup>しやうぜん</sup>として帰宅する途中で立ち寄ったスーパーのレジで、我々は見ず知らずの初老の英国人女性に声をかけられました。

「あなたたちはどこから来たの？日本？テレビで天皇陛下の訪問を観たわ。素敵だったわ！」

沈み切っていた私と妻の心が優しく救われたのは言うまでもありません。

現在の良好な日英関係は、皇室と王室との長く親密な関係や両国政府の真摯<sup>しんし</sup>な努力とともに、まぎれもなく国民レベルの信頼関係によって支えられているのです。あの日の老婦人のあたたかな言葉は、国籍を超えた人間一人一人の身近な交流がいかに重要であるかを改めて教えてくれているような気がします。

(山形新聞 2024 年 8 月 27 日付「直言」欄からの転載)